

特別史跡大坂城跡発掘調査(OS05 - 1次)現地説明会資料

2006年2月15日(水)
大阪市教育委員会
財団法人 大阪市文化財協会

はじめに

大阪城公園は、豊臣秀吉の築いた大坂城が大坂の陣によって焼失した後、江戸時代初め(元和6(1620)年~寛永6(1629)年)に再建された徳川氏大坂城の跡地に当たります(表1)。その後の度重なる火災によって江戸時代の天守などは現在では失われてしまっていますが、乾櫓や千貫櫓などの建物、石垣や堀などは残されており、江戸時代の様子を現在に伝える貴重な文化財となっています。

これまでに本丸では5箇所の発掘調査が行われています。その中で1984~1985年に天守閣東側の配水池の南側で行われた発掘調査では、豊臣氏大坂城の本丸詰ノ丸の石垣が発掘され、豊臣氏大坂城を考える上で大きな発見となりました。

今回の調査は、昭和29年から行われてきた石垣の保存修理事業の一環として、石垣や階段の構築法や石垣築造当初の姿を明らかにすることを目的として行われました。調査地は大坂城天守閣の北側の山里出枳形に位置します(図1)。松平筑前守(前田利常公)の丁場(工事担当区)に当たり、第2期工事(元和10(1624)年~寛永3(1626)年)で建設された場所になります(図2)。江戸時代の大坂城を描いた絵図の中で、寛永7(1630)年以前に描かれたと考えられる「大坂城普請丁場割之圖」(図4)や寛文5(1665)年以前の「大坂御城圖」(図5)には調査地東側に当たる地区に階段が見られ、当初から階段が見つかることは予想されていました。

調査成果

[区] (裏面の調査区配置図を参照)

調査地東側に設定した 区および 区では、階段と前述の絵図には描かれていない会所および暗渠が見つかりました。これらの遺構は徳川氏大坂城再建時のものと考えられます。焼土や幕末か

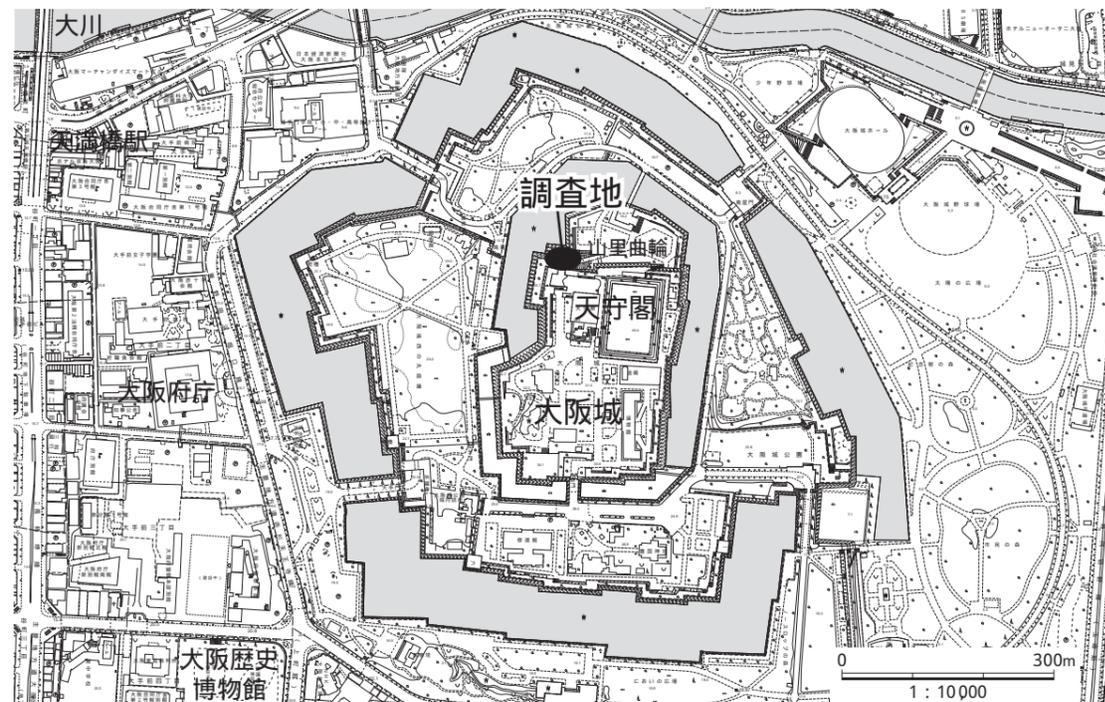


図1 調査地位置図

ら明治時代の遺物(陶磁器や煉瓦など)を含む盛土層の下位から見つかり、明治17年の「大阪実測図」(明治21年刊)図3)では調査区に階段が示されていないことから、明治維新で大坂城が焼亡した時に地中に埋もれたものと考えられます。なお、階段の南側は昭和の後半まで見ることができたようです。

階段(雁木)図6)

花こう岩の石材を使用した階段が6段見つかりました。石材の幅は40~50cmで、厚さは約20cm、約15~20cmの間隔をあけて設置されています。階段(雁木)石の側面には「八」や「く」の字の刻印が確認されました。また、6段目の西側には階段と同方向の溝が見つかりました。溝の西肩がほぼ垂直な壁になっていること、幅がおおよそ階段石の幅であることから階段石の抜き取りの跡の可能性がります。

会所(図7)

一辺約160cmと約120cmの花こう岩を上下2段で組み合わせて造られていました。南東端の上面は火を受けて黒色~赤色に変色していました。また、上面には幅11~12.5cmの溝が1箇所もしくは3箇所切られています。会所内へ水を流し込むためのものではないかと考えられます。石の内側には幅約4~5cmの切り込みが見られます。会所を埋めていた埋土の上面に板材の焼けたものが見つかったことから、板で蓋がされていた可能性があり、蓋板をかけるための切り込みと考えられます。

暗渠(図7)

会所の内部には、南側と西側に天井石と床石、側石で組まれた暗渠が確認されました。溝の3本切られた石に対してのみ暗渠が造られていました。出入口の幅約55~60cm、深さ約65cmあります。南側の出入口が石で蓋をされていたこと、埋土から瓦や磁器が見つかったことから、意図的に埋め戻されたと考えられます。南側の暗渠は南に向かって東へ4振っており、傾斜は南へ約10°あります。西側は西に向かって南へ5振っており、傾斜は西へ約7°あります。

この会所と暗渠は、当時の土木技術を知る上でも重要な遺構であると言えます。

[区]

調査地中央部の 区では、石垣背面の裏込の状態が観察されました。裏込は排水の機能を果たし、石垣の崩壊を防ぐためのもので、約3mの深さまでの裏込石を確認しました(図8)。

[区]

調査区のほぼ全体が裏込石で占められており(図9)、特に石垣の隅部に当たる 区ではその幅が4m以上ありました(図10)。

最後に、これまでに大阪城内で行われた発掘調査は少なく、知られていないことも多いと考えられます。今回発見された会所と暗渠もその一つです。今後実施される発掘調査によって、さらに大坂城の実態が明らかになるものと期待されます。

[引用・参考文献]

大阪市文化財協会1985、『特別史跡 大坂城跡』
1987、『特別史跡 大坂城跡』
2002、『大坂城跡』

岡本良一1970、『大坂城』岩波新書

加藤理文2005、「城の普請 石垣」:『城造りのすべて 歴史群像シリーズよみがえる日本の城25』、pp 40~51

三浦正幸2005、『城のつくり方図典』小学館

渡辺武1983、『図説再見大坂城』大阪都市協会

渡辺武1994、「徳川幕府の大坂城再築」:『大坂城 歴史群像名城シリーズ1』、pp 100~103

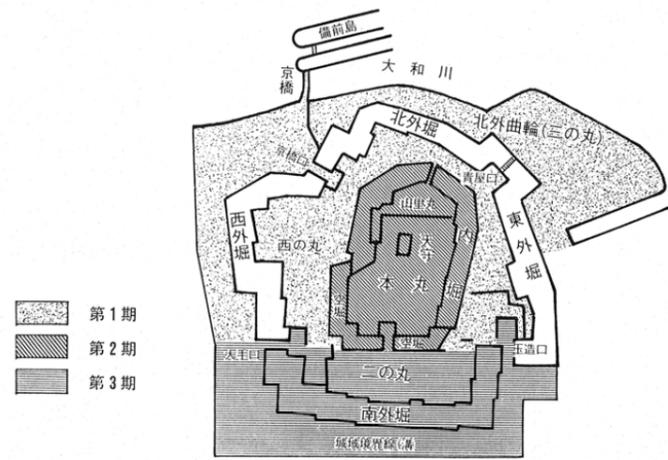


図2 再築の工期別区分図(渡辺武1983)

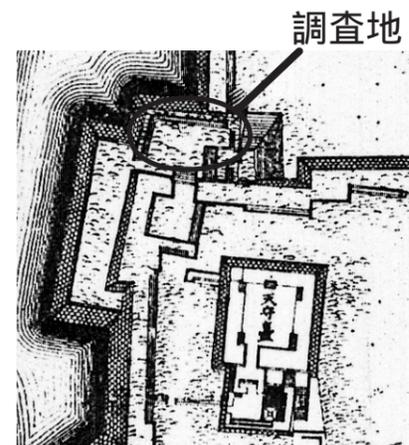


図3 大阪実測図

表1 年表

慶長二十年(1615) (元和元年)	大坂夏の陣で大坂城落城し、 全城焼亡、豊臣氏滅ぶ 松平忠明大坂城主となり、焼跡整理と 市街地の復興に努める
五年(1619)	幕府、大坂を直轄地とする
六年(1620)	将軍秀忠、第1期の再建工事を始める
八年(1622)	第1期工事了
九年(1623)	徳川家光、三代将軍となる
元和十年(1624) (寛永元年)	第2期工事開始
寛永三年(1626)	大天守竣工、第2期工事了
五年(1628)	第3期工事開始
六年(1629)	第3期工事了
万治三年(1660)	青屋口焰硝蔵に落雷、本丸御殿、天守 など破損、死者多数
寛文五年(1665)	天守の鯨に落雷し、全焼する
天明三年(1783)	大手多聞櫓に落雷し、全焼す
弘化二年(1845)	大坂・兵庫・西宮・堺町人達の 御用金で、大修理工事開始 (ほぼ全面的な修理)
嘉永元年(1848)	大天守は欠くが、 再築当初の旧観を取り戻す
安政五年(1858)	大坂城大修理完成する
慶応元年(1865)	将軍家茂、長州征伐のため大坂入城
明治元年(1868)	幕府軍、鳥羽伏見の戦いに敗れて 大坂城に拠る。 全城ほとんど焼失する
四年(1871)	鎮台本部となる
十八年(1885)	和歌山城二の丸御殿(紀州御殿)を 本丸に移築する
二十一年(1888)	第四師団司令本部となる
昭和五年(1930)	天守閣復興工事始まる
六年(1931)	天守閣復興する
二十年(1945)	空襲により京橋口多聞、二番、 三番、伏見、門等焼失する
二十八年(1953)	一・六番櫓修復工事開始、 以来各所の修復あいつぐ
三十四年(1959)	大坂城総合学術調査実施し、 本丸地下に石垣を発掘する 現存の全石垣が徳川再築の ものと判明する
六十年(1985)	配水池の南側で豊臣時代大坂城本丸の 詰ノ丸外郭廻り石垣発掘する。

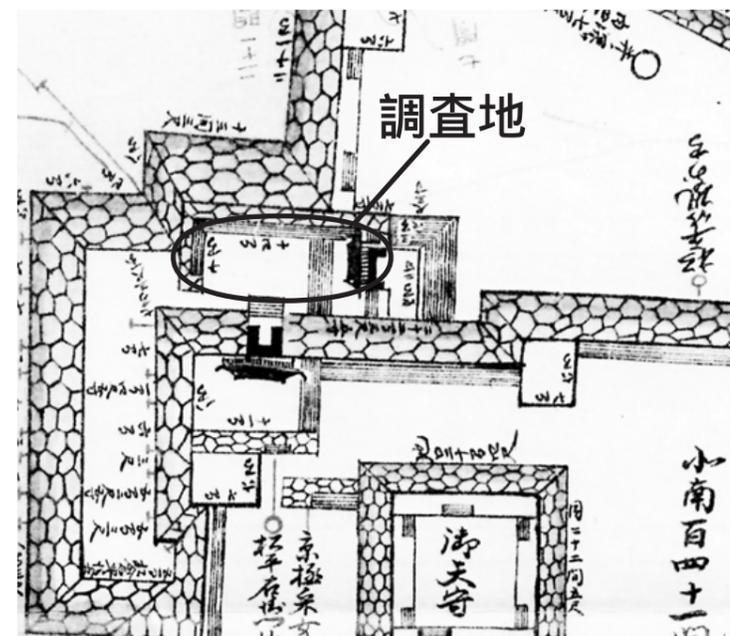


図4 大坂城普請丁場割之圖 寛永7(1630)年以前

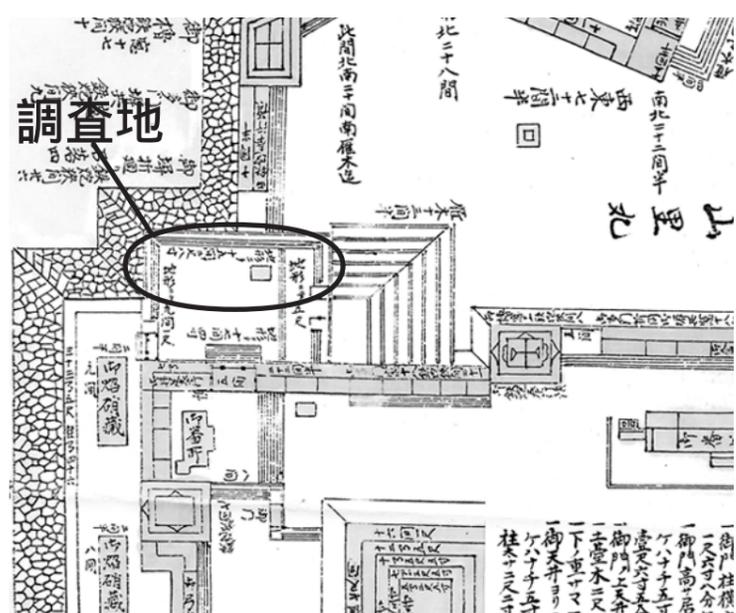
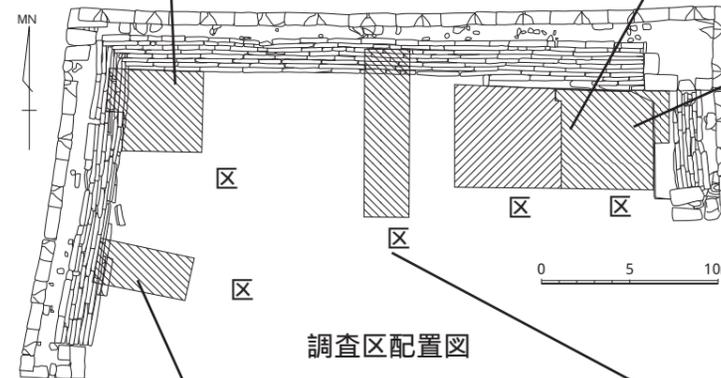


図5 大坂御城圖 寛文5(1665)年以前



図9 区裏込石の状況



調査区配置図



図6 区階段遺構



図7 区会所および暗渠



図10 区裏込石の状況



図8 区裏込石の状況